

連載2 育てにくい子どもと育てやすい子どもがいます

判断のむつかしいちょっと気になる子ども

発達検診で重い障がいのある子どもは間違いなく判定されますが、多くの子どもは「様子を見ましょう」といわれ、何ら手立てを講じることなくそのまま小学校に上がる例がしばしばです。また、検診の場で保護者に発達のおくれを指摘した臨床心理士に、母親が怒りの声を上げた例もあるように、保護者に率直に伝えにくいのも現実です。

2歳ぐらいまでの子どもは「脳の可塑性」が強いという説があり、虚弱遺伝子がプラス（可塑性遺伝子）に変化する柔らかい脳を持つこの2歳頃に、障がいかどうかを判定するには問題があるとお医者さんも指摘しています。

育てにくい子ども、育てやすい子ども

世の中には育てにくいといわれる子どもがいます。保育園の場でいえば、担任の交代や長時間保育のアルバイトの先生になつかずに、ずっと泣いている子どもがいます。絶えず抱っこを求める子どもがいます。反対に、ものは言わないけど、いつもニコニコしていて、世話の楽だった子どもが3歳ぐらいになると、突然危ないことをしたり、高い所に登ったりする子どもがいます。このような子どもはリスクチャイルドと呼ばれ、何らかの発達的な問題を抱えている場合が多いと推測されるだけに、乳児期担当の保育者は子どもの遊びを観察して早く支援を行なう必要があります。

体内時計が働かない子ども

明治16年に日本に時計が入ってきたそうですが、それまでは太陽が上がればお寺の鐘が鳴り、昼になれば鐘が鳴り、太陽が沈む夕方にまた鳴りました。この大きく分けて三つのリズムで私たち日本人は暮らしていました。しかし、当たり前ですが人類は地球の自転に合わせて暮らしてきました。朝は太陽の光で目が覚めます。そしてお昼を食べ、夜はお風呂に入ってほっとします。そして眠り、朝起きます。これを体内時計、概日リズムと呼ばれ、地球の自転とともに身につけたリズム（時間）です。リズム崩れの子どもが保育園にはたくさんいます。

短睡眠の子ども

体温が温かいまま、眠いまま登園してくる子どもは11時ぐらいから元気になります。また、午睡もぐっすり眠り込む子もいます。睡眠にはレムとノンレ

ムとがあって、レム睡眠は目玉が動いているような状態です。これは目をつむっているけど夢を見ているのです、脳は働いているのです。このレムは寝る前と朝方に起こり夜中にぐっすり熟睡する眠り方はノンレム型です。保育園の午睡にぐっすり型が増えているのです。3時になってもなかなか起きませんが、今度は家に帰ると夜遅くまで起きている悪循環を短睡眠といわれ、発達障がいの原因の一つだという説もあります。

ハイハイをしないままに歩く子ども

ハイハイ（高ハイ）をしないまま歩いてしまう子どもが結構います。歩き始めると倒れやすく顔を打っています。ハイハイをすることで重力に逆らう力（抗重力）が神経系統に養われ、バランスを取る、歩く、ジャンプするに必要な力です。ハイハイしないで歩いた子どもと、十分にハイハイをして歩いた子どもの足型を見ると、ハイハイをして歩いた子どもの足型には、くっきりと土踏まずがあります。ハイハイをしない子は偏平足といわれる足型です。そして言葉おくれや発達上の問題のある子どもの足型は土踏まずの形成が不十分です。